

〈知者の自由〉の形而上学
——ストア派とプラトン主義における展開——

近藤智彦（北海道大学）

ストア派は「知者のみが自由である」と説き、その「自由」を「自分の欲するがままに生きること」と説明しているが、以前ある発表でこのことに言及した際、ストア派がそのように「自分らしい生き方」を称揚したはずはないのでは、という質問を受けたことがある。この説明はストア派の資料に見出され、彼らのものであることに間違いはないのだが、その疑念も理解できる。ストア派からプラトン主義に受け継がれたこの問題含みの「自由」概念については、プラトン『国家』における「自分のことを為す（τὸ αὐτοῦ πράττειν）」の展開として解釈できることを拙論（‘The principle of “doing one’s own” in the Platonic-Stoic tradition’ (2021)）で示したが、本提題ではその文献学的検討を踏まえて次のことを論じた。まず、クリュシッポスとプロティノスの自由論の相違点と共通点を確認した上で、通常の意味での「自分らしさ」の対極に真の「自由」を見出した彼らの哲学的前提——特に行為主体の「一と多」の問題をめぐる——を掘り下げる。その上で、この伝統の内に入りながら通常の意味での「自分らしい生き方」の再評価を試みているように見えるパナイティオスないしキケロの議論を取り上げ、その意義と限界を考察する。